



No. 75

The University of Tokyo Forests News

科学の森ニュース

September 10, 2016

発行：東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林

富士癒しの森講義室お披露目会

富士癒しの森研究所

旧職員宿舎を改修して完成した、富士癒しの森講義室のお披露目会を5月17日（火）に行いました。インターネットを使った遠隔講義などを想定し、大型モニター、無線LANなどの情報通信機器を備えたICT講義室です。お披露目会では、富士癒しの森講義室と東京（弥生キャンパス）の会議室の2か所を高画質映像伝送システムとTV会議システムで結び、遠隔講義のデモを行いました。学生に見立てたお客様に、研究所で採取した植物を観察してもらいながら、その植物の映像を弥生キャンパスの会議室に伝送し、会議室にいる先生が解説をしました。葉に生えている微細な毛や葉の落ちた跡の独特の模様など、非常に細かい部分まで画像で伝えることができました。実際の講義や実習での活用も進んでいます。



（左）遠隔講義デモの様子 （右上）林長挨拶 （右下）外観

「つとっこ」作り

秩父演習林

5月22日(日)に秩父演習林で実施された全学体験ゼミナール『春の奥秩父を巡る』(学部1・2年生向け)の現地講義で、学生たちが秩父の郷土料理「つとっこ」作りを体験しました。つとっこ(「つつっこ」ともいう)は学生宿舎がある旧大滝村栃本地区など秩父地方の山間部の集落で食べられてきた保存携帯食で、展葉後のまだ固くなる前のトチノキの葉で小豆を混ぜたもち米を巻き、鍋で煮込んだものです。栃本地区に住む演習林の元職員の方に教えていただきながら、学生たちも自らトチノキの葉で包む作業を楽しみました。出来上がったつとっこは秩父の伝統的な漬物「しゃくしな漬け」などとともに美味しくいただきました。



トチノキの葉でもち米を包む学生たち

富良野市と合同で公開セミナーを開催しました

北海道演習林

6月19日(日)に公開セミナーを開催しました。今回の公開セミナーは、「森林環境の保全と持続的な木材生産」と題し、富良野市市制施行50周年記念行事として富良野市との合同開催となりました。富良野市長はじめ総勢48名の参加者は、木材生産を行っている森や風害跡地、樹木園の苗畑を訪れ、北海道演習林が取り組む森づくりについて学び、風害跡地では樹木園で育てた苗木を植樹しました。途中で立ち寄った、周囲長が約7mのミズナラ巨木を見学した際には、皆様あまりの大きさに驚かれていました。



ミズナラの巨木の前で記念撮影

絶滅をふせげ！房総丘陵のヒメコマツ保全活動

千葉演習林

房総半島のヒメコマツは氷河期後の気温上昇により隔離的に残された遺存植物として貴重ですが、マツ材線虫病等の要因により激減しています。2015年現在、房総全域で約80本となり、千葉県レッドデータブックの最重要保護生物に指定されています。そのため、千葉県では官民学の枠を越えた保全協議会を設置し、個体群回復を目指しています。千葉演習林も協議会の一員として、遺伝子保存のための接ぎ木苗の育成や集植所の造成、次世代苗の生産などを行い、大学演習林の立場から植物生理学的・生態学的・集団遺伝学的な研究に取り組んでいます。



天然更新した貴重なヒメコマツ

演習林では、毎月1回、金曜日の午後に通称「演習林ゼミ」というゼミを行っています。このゼミは毎週行われる通常のゼミとは異なり、演習林に所属する教員と学生が1年に1度、研究成果や最近の取り組みの発表を行うだけでなく、演習林に関連のあるゲストの発表も行われます。演習林ゼミは、さまざまな分野の教員や学生が集まることから、学生にとっては多種多様な質問やアドバイスが得られる場であり、教員にとっては異分野交流を図ることのできる貴重な場となっています。ゼミの開設当時の様子をよくご存じの井出雄二先生（現在、生圏システム学専攻）によれば、もともと演習林教員には学生を指導



6月のゼミでは会場がほぼ満杯に



斎藤馨先生によるゲスト発表で登場した大型ポスター

できる制度がなく、当然、演習林単独のゼミはなかったそうです。それが、1994年から大学院学生を指導できるようになり、演習林第1号の学生として、1995年に湯定欽さんを修士の学生として受け入れ、たった2人でゼミをしていたそうです。次第に所属学生が増えるにつれて、学生のいる研究室らしい雰囲気になり、地方演習林の教員や所属学生が全員発表する形になったとのこと。最近では、毎回、演習林の4研究室ごとのアレンジで開催されるようになっており、月ごとにテーマがガラリと異なるようになっていきます。また、1年に1度は、演習林技術職員が研究や業務内容を発表する回も設けています。このような歴史を持つ、自由で幅広い議論ができる演習林ゼミ。ぜひ一度、のぞいてみてください。

演習林のイベント情報

詳細はホームページをご覧ください。各地方演習林にお問い合わせください。

【9月】

- 3日 せと環境塾 2016 (生水研)
- 10-11日 演習林交歓会 2016 ◆ (千葉)
- 14日 第2回癒しの森の植生調査隊 (富士)
- 16-20日 体験ゼミ「伊豆に学ぶ(夏)3」☆ (樹芸)
- 18日 シデコブシの会「秋の植物観察会」(生水研)

- 22-23日 体験ゼミ「秋の奥秩父を巡る」☆ (秩父)
- 22-23日 体験ゼミ「危険生物の知識」☆ (富士)
- 29-30日 千葉演習林「郷台林道一般公開」(仮称) (千葉)
- 30日 子ども樹木博士認定会 (田無)
- 下旬 犬山研究林利用者協議会 南部中学校総合学習
「犬山の森林の現状と今後の姿について・歴史について」の話と、
森林の見学・植物観察等◆ (生水研)

【10月】

- 1日 東大教職員向け特別ガイド「きのこに親しむ」◆ (富士)
- 2日 神社山自然観察路秋季一般公開 (北海道)
- 8-9日 体験ゼミ「秋の奥秩父を巡る」☆ (秩父)
- 8-10日 体験活動プログラム「南伊豆という
一地域との連携に学ぶ」☆ (樹芸)
- 15日 体験ゼミ「危険生物の知識(秋編)」☆ (千葉)
- 15-16日 千葉演習林ボランティア会 Abies「お月見研修会」◆ (千葉)
- 16日 シデコブシの会「野鳥についての講演会」(生水研)
- 22日 チョコレート作りを体験しよう! ◆ (樹芸)

【11月】

- 5-6日 東京大学秩父演習林 創立100周年記念式典・祝賀会◆ (秩父)
- 20日 シデコブシの会「初冬の植物調査会」(生水研)
- 26日 犬山市市民大学講座(案内人養成講座現地研修) (生水研)

凡例…無印：一般向け ☆：学生向け ◆：その他
(<http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/>)

科学の森の動植物紹介

ジャケツイバラ

マメ科 ジャケツイバラ属

学名： *Caesalpinia decapetala* var. *japonica*

千葉演習林

「フィールドで作業するときは長袖着用！」このことを守らないと大変痛い目に遭います。なぜならこのジャケツイバラがあるからです。ジャケツイバラはツル性の



落葉低木で、マメ科なので枝豆を大きくしたような豆果（とうか）ができます。黄色い綺麗な花が咲きますが、カギ状の大変鋭い刺があり、ひとたびこの刺に絡まると薄手の服だとひとたまりもありません。フィールドにはほかにもさまざまな危険が潜んでいます。格好良い洋服もいいですが、安心して作業するには身支度を確実に！

コラム

多雪地産のブナは萌芽能力が高い!?

教育研究センター 後藤 晋

樹木の萌芽能力（切り株から萌芽枝を発生させ、再生する能力）は種によって大きく異なり、その能力が高いクヌギなどでは伐採しても萌芽更新を行うことができます。しかし、同じ種の中で萌芽能力に地域差があるかどうかはほとんど分かっていません。富士癒しの森研究所でブナの産地試験地*を2014年秋に伐採し、その時に材質調査用の円板などを採取しました。翌年の初夏、整備をしようとして切り株をみると、萌芽枝が出ているものといないものがあります。この違いは個体の由来である産地によって違うのではないかと思いつき、萌芽能力の産地間差を調べてみることにしました。萌芽枝の発生量を調査した結果、やはり萌芽能力には明確な産地間差があり、しかも積雪深が大きい産地ほど萌芽能力が高いことが分かったのです。この結果は、雪深い地域のブナは伐採後の萌芽能力が高い性質を持っていることを示唆します。本来、ブナは萌芽能力がそれほど高い樹種ではありませんが、新潟などの豪雪地帯ではブナ林で萌芽更新を繰り返していたようで、地域のブナの性質をうまく生かした施業が行われていたと考えることができます。今回、役目を終えたはずのブナ産地試験地から、思いがけず貴重な知見を得ることができました。



*産地試験地：異なる産地から種子を集め、同じ場所に植えて生育比較し、種内の地域差を調べることができる。

ブナ産地試験地を伐採している様子。このときは翌年に一部の切り株から萌芽が発生（右上）し、新たな発見が生まれるとは思わなかった。

科学の森ニュース (The University of Tokyo Forests News)

第75号 (No. 75)

発行日 平成28年9月10日

発行人 富樫一巳

編集人 後藤 晋

〒113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1

東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林広報情報委員会

TEL 03-5841-5497 FAX 03-5841-5494

E-mail mori2015@uf.a.u-tokyo.ac.jp